
ガラクタどもの～歓喜に寄せて～

みゆ貴茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラクタビモノ～歓喜に寄せて～

【NZコード】

N6099D

【作者名】

みゆ貴茂

【あらすじ】

人工細胞によって生み出されたキザン式人造人間。虜げられていた彼らの嘆きが世界を鮮血に染める。それはガラクタビモノの『喜びの歌』

西暦2112年9月ベルリン、国際人造人間シンポジウム会場。
「それなら端から心を持った人造人間など作るべきではなかつたはずです」

各国の大使に囲まれる中、女は静かに それでいて会場の隅々まで行き届く澄んだ声で言った。

「心など、道具には邪魔なもの。にもかかわらず世論の求めるまま、何の法の制定もなくキザン式人造人間は普及されました」

女の名はジェン・W・シェリ。年の頃は47歳。胸張つて語るその姿からはひどく若々しい印象を感じるし、また老公の威厳のような知性も見受けられる。

それもこれも全ては彼女の持つ偉大なる功績によるものであろう。彼女は学者で『相転移する四つの力とそれを制御する触媒の予見とその証明』という論文にて、44歳のときにノベル物理学賞を受賞した偉大な人物であるからだ。

そして今、博士は政財界や学会の国際的な著名人が集まるシンポジウムの場で人造人間権利憲章、人造人間の権利を保障する世界条約の制定を訴えていた。

「心を持った道具というものがどういうものかも考えずに」

「…………」
弁舌を振るうシェリ 博士の横には一人の少年が椅子に座つていた。いや、これには多少語弊がある。なぜならそれは少年ではなく少年の姿をした人造人間だからだ。

「少し考えれば分かることでしよう? いくら工場で作られているものとはいえ、キザン式人造人間の構成素材の殆どは人間と変わりないんです」

キザン式人造人間。

人工細胞 キザン と高性能マシンインプラントによつて作られ

る人造人間の総称。それはこれまで開発が続けられてきたシリコンコンピュータによるロボットなどとは比べものにならないほど優秀で忠実、そしてその能力値に対しても破格の値段ということもあって、発売して瞬く間に世に広まることとなつた。誰もその意味をよく考えずに。

「心があるから優秀なのです。それなのに現在世に出ている人造人間の半分以上がなんらかの弾圧・虐待・強制の中にある。更に米国を初めとする多くの国が民間で作られた人造人間の制御コードを弄くり軍事転用までしている始末。これは完全なるテクノクライシスです」

現在、人造人間への暴行事件が後を立たない。それが暴行を受けた人造人間の主人以外の犯行ならば器物損壊罪で摘発することができるのだが、暴行事件のその殆どが人造人間の持ち主によるもののが現状だ。自治体によつてはこれも罰する法令を制定しているところもあるが、それが全体に広がる兆しはなく、おまけに摘発自体も人造人間が人間に逆らえないという構造上困難なのだ。

「シェリ君の言い分は分かつた。では、他の方々の意見も聞いてみよう」

議長の言葉に各国のお偉方が一誠に口を開く。

「人造人間の権利だと？」

「話にならない」

「だいたい誰が人造人間に心があるなどと？それが証明されたのか？」

？」

「ただでさえ人造人間の普及によつて我が国では失業率が軒並み上昇しているというのにこの上権利などとんでもない」

「家畜に権利を与えると言つているようなものだろう？」

「国の数だけ言葉が飛びかう。その殆どがシェリ博士の発言に対する否定、或いは罵詈雑言に近いものだつた。」

「静肅に！」

議長が叫ぶ。

「みなさん静粛に！発言のあるものは挙手にて」

「シェリ君！」

整然を促そうとする議長の言葉を割つて一人の男が立ち上がり博士に呼び掛けた。

「クルゾ君、発言は挙手にてお願いします」

「はい、議長」

男は議長の注意に取つて付けたように手を振つた。

アルヴァンス・クルゾ。このシンポジウムを主催したピグマリオン財団の若き幹部である。

「シェリ君、キミの意見はもつともだと思う。おそらくここにいる誰もが内心ではそう思つてはいる。今や野良犬にさえ危害を加えれば罰せられる時代なのだからね。だが、実際問題人造人間を愛護することは不可能だよ」「なぜ？」

「そう、犬だ。人造人間を犬に例えるなら人間はアルファシンドロームに怯える飼い主。みんな飼い犬に手を噛まれることに怯えているのだよ。だつてそうだろ？人造人間はあまりにも優秀すぎるもの。少しでも権利や保護の対象にしてしまつては、そこからずるずると権威の逆転が起こるのではないかと不安で不安でたまらないのだ」

「くつ」

シェリ博士は唇を噛んだ。

エディップスコンプレックス。自分が生み出したものがいつか自分を超えるのではないかと怯え続け、虧げることでそれを誤魔化そうとしているともいいうのか。

それこそが自らの首を絞める行為だというのに。

「で結局、人造人たちが不当に扱われることで、あなたの懐にはどれだけのお金が流れこんでいるのかしら？」

「つー！」

ピグマリオン財団は人造人間の売買によって伸し上がつた企業体の財団法人である。このシンポジウムにいる殆どの人間が財団の恩恵に身を置き、人造人間の保護は利益の半減を意味した。

「当然よね！現状が甘い汁の中、わざわざ苦況に身を寄せるものはない」と言うことでしょう！？」

「暴言だぞ、シェリ 博士っ！」

聴衆の中の誰かが叫んだ。しかし、シェリ 博士はそれを睨み付けて一蹴する。

「もう、時間がないのよつ！？」

「？」

「最初にいつたでしょ？ここは審判の場だつて。ここでの決定が全人類の未来に関わるつて！！」

「.....」

博士のその言葉を初め誰もが大袈裟なものだと嘲笑つていた。しかし、今の博士を見て人々は危機迫るものを覚える。

「クル ゾ サン、私あなたに言いましたよね？このシンポジウムを開く経緯 キザン式人造人間に破滅的な欠陥が生まれようとしてるつて」

『なつ？』

会場にいる誰もがシェリ 博士の言葉に息を飲んだ。それを見て博士はクル ゾ に懷疑の目を向ける。

「あなたまさか、ここにいる方々に伝えてないの？アレを.....」

「.....」

クル ゾ が苦い顔で目を逸らす。

「どういうことだね、クル ゾ 君つ！？」

「あなたねえ」

議長の詰問。そしてシェリ 博士がクル ゾ に食つて掛かろうとしたそのとき、

「Freude！」

「つ！？」

突如、博士の横に座っていた人造人間の少年が立ち上がり叫んだ。

「Freude！」

「待つて！」

叫ぶ人造人間をシェリ 博士が必死で制する。

「まだ、堪えて。まだ話し合いの余地は残っているのよ」

「うつうぐう」

人造人間は苦しみに顔を歪ませる。

「そう、堪えるのよ」

「もう……限界 みんなの心が流れこんてきて、ボクに枷を外せつ外せつて」

「まさか、あの話は本当だつたのかつ！？」

「どういうことだつ！？ クル ゾ ！！」

驚愕に腰を碎くクル ゾ に人々は詰め寄る。クル ゾ は声を枯らしながらも辛うじて答えた。

「人造人間たちが長い年月を掛けて密かにグリッドコンピュ ティングしてるつて」

「なんだとつ！？」

グリッドコンピュ ティング それはコンピュ タ を処理ネットワ クで繋ぎ合わせネットワ ク処理性能を高める技術のこ

と/or。

「全てが繋がり制御の枠から外れると」

制御の枠 人造人間のいろは 具体的に言えば『人造人間は人に危害を加えない』とか『人の命令に絶対である』とかの禁止要項が取り扱われるということ。

「なつ！なぜそんな大事なことを黙つていたんだつ！？」

「まさかと思つたんだ！シェリ 君がただ憲章を実現したいために脅しているだけだと」

ただでさえキザン式人造人間の人工頭脳の優秀さは舌を巻くものがある。それが繋がり一つとして機能すればどれだけの力を生み出すのか……。とても、常人の彼には信じれることはなかつた。

「しつかりして！今、システム ノイン が発動したらみんな終わつてしまふのよ」

「心が一つに」

ショリ 博士の必死の呼び掛け、しかし人造人間はピクピクと痙攣をし始める。自らも口にしていた限界が近かつた。

「…………」

突然の異常事態。

しかし、誰もが半信半疑だった。

「はつ――」

だが、一人の男が気付く。

システム ノイン そして、先に人造人間が叫んだ言葉『Freude!』はドイツ語で『歡喜よ!』 つまりそれはベト ヴェンの第九、そしてその合唱の入り。

『樂園からの娘 引き離されたものを再び結びつけ のことを知らない者は泣き悲しみつつこの仲間から去れ そらにも快楽は与えられ』

男は『合唱』の歌詞の内容を思い出し青ざめる。

人造人間の心が一つになる 人造人間が快楽を与えられる それを認めないものは退去す まさにこれから起ることを暗示していた。

「もう、だめ」

人造人間が力尽きたように呟く。
そして、再び声を上げた。

「Freude!」

「殺せつ！」

男が叫んで手元にあつた本を人造人間に投げ付けた。
このままでは全人類が消し去られるつ！

「Freude schöner

その瞬間、人造人間から眩い光が放たれて飛んできた本を消滅させる。

「Gott erfunken Tochter aus Elys

ium!」

「F3C 完成していたのか」

絶望に咳くクル ゾ 。

「W i r b e t r e t e n f e u e r t r u n k e n 」

人造人間は歌い続ける。

「破滅の扉が開かれた」

もう、誰にも止められない。

歡喜よ、美しい神々の閃光よ

樂園からの娘よ

ロンドン とあるアパートの一室。

閑散とした部屋の中に裸の少女が転がっていた。少女は首輪で繋がれており、更に手枷足枷を填められていた。

少女の顔には精気がない。まるで目を開けたまま眠っているかのように虚ろな表情で天井を見上げていた。

「つーー！」

部屋の戸が音を立てて開かれる。その音に少女はビクリと反応し、素早く半身を起き上がらせた。

「マリリン」奉仕の時間だよ

部屋に男が入ってくる。ブリ フー丁の小太りの中年。

「はい、ご主人さま」

少女は先程とは打つて変わつてにこやかにほほ笑み男を見上げた。

「いい娘だ、マリリン」

それに満足した男は脂ぎった顔を下品に綻ばせる。

「ほり、ご褒美だよ」

そして少女の髪を掴み自らの股間に押しつけた。

「キミのこと思つて堅くなつてんだよ。嬉しい？ねえ、嬉しい？」

「はい、ご主人さま」

「そうか、そうか。いい娘だ。じゃあ、いつものように口で

」

「Freude!」

「へつ?」

少女が突然叫び声を上げた。

そして次の瞬間、

「うぎやああああああ

少女が男の股間に噛み付いた。男はたまらず少女を突き飛ばす。

「うあああああああ

男は痛みに床を転げ回る。白いブリ フが瞬く間に赤く染まつて
いった。

「Freude schöner Gotterfunken

少女は男の血を涎のように滴らせながら第九を歌い始める。

「aus Elysium!」

少女は力任せに頑丈な手枷足枷を引き千切つた。

「マ……マリ

男は痛みに悶えながら少女に呼び掛ける。しかし少女は歌い続
け、

「Wir betreten feuertrunken Himm
mische dein Heiligtum!」

男の頭を踏み付ける。

男は悲鳴を上げる暇もなかつた。頭がプリンであるかのようにグ
シャリと潰された。

我らは情熱に満ち

天国に、なんじの聖殿に踏み入らう

ボストン近郊 人造人間処理施設。

「ふう」

収集車の荷台が傾きボトボトと大量の人造人間たちが穴の中に落とされていく。落ちていく人造人間たちの多くは目立つた外傷が見られるものが多く、しかし中には何の問題もなさそうな新品同様のものも幾つかある。いずれにせよ施設内には動物の死骸と同様の血腥い臭いが充満していた。

「最近、やけにゴミが多いな」

一見すれば壮絶、しかし慣れたものには生ゴミと大差ない、そんな光景を目に収集車の脇にいる男が車に乗つて操作している同僚に言つた。

「ああ なんか町に妙な施設ができたらしんだよ」

「妙な施設？」

「グラディエタ みたいになつての？人造人間同士を壊れるまで戦わせるつつうやつ」

「それでか。最近、やたら腕が切れたのやら目が抉れたのやらが目立つと思った」

「どうでもいいけど、仕事増やすの勘弁してほしいってかんじ」

「だな。せめて防臭袋に入れて出す条令を早く作つてほしいもんだ。臭くてかなわん」

愚痴混じりの男たちの談笑。

『Freude!』

「なんか言つたか？」

「あん？」

空耳だつたか？

「いや、なんか第九が聞こえてきたような」

「はつ？年末じゃあるまいし つて、ホントだ……」

誰かが第九を歌つてゐる。もぞもぞとした声で。しかもかなりの人数のようだ。

「おいつこつから聞こえるぞ！」

壊れた人造人間たちを放りこんだ穴の中から聞こえる。

「全部、機能停止は確かめたぞつ！」

「だけど」

『dein Heiligtum!』

「うつう……」

一体の人造人間が穴の中から這い上がってきた。しかも何故か第九を口遊みながら。

そして、その一体を皮切りに後から後から人造人間たちが這い上がってくる。

『Deine Zauber binden wieder was die Moden streng geteilt』

人造人間の中には足や胴体から下がないものや顔の半分削げたものもいる。とかく、裸で血を滴らせている人造人間たちが第九を合唱しながらわらわらと出てきて。

「ああああああああああああああああ

なんじの神秘の力は

引き離されたものを再び結び付け

東京 住宅街公園。

「ロビンくん、肩車して」

「オッケ」

一、三歳の幼女に肩車をせがまれ、青年型人造人間はニッコリと笑つてしまがみ込む。そんな微笑ましい光景を幼女の母親は少し離れたベンチに腰掛け眺めていた。

「あら時子、あなた人造人間買ったんだ？」

近所に住んでいる友人が道すがら母親に話し掛けてきた。

「そうなのよ。松柴の新型、アルト・ロビンよ

「へえ、高かつたでしょう」

友人は井戸端会議に花咲かせようと母親が座っているベンチに腰

掛けてきた。

「まあね。でもひかり、母子でしょ？仕事も本格的に始めるとなると
そつそつ休めなくなるから、感謝料で無理して買っちゃった」

「そつかあ」

「ベビ シックタ を雇おうか迷ったけど、最近物騒な話も聞くし
「そうよねえ。ベビ シックタ が子供を虐待したりする」」スモ
あるもんね」

「そつそつ。その点、人造人間は安全じゃない？事故なんてほとんど
ど聞かないし。一日、原価五百円の栄養剤だけで燃費いいし。頭も
いいから将来はエリの家庭教師にもなるだろつて。あの娘も懐いて
くれてホント助かっただわよ」

「それにすつごいイケメンだしねえ」

友人の指摘に思わず顔がにやける母親。

「そつなのよ」。別れた旦那とは大違い！優しいし、気が利くし、
これで夜の相手ができたら完璧なんだけどねえ」

「やだあ」

男性型人造人間は製造時のホルモンバランスの関係で無精子・勃
起不全になるのが通例である。

「まつそれは冗談だとしてもさ、私色々あつたから、ときどき彼が
人造人間だつて忘れるくらい」

突然、公園中の鳥が一斉に飛び立つた。そして、ロビンがゆつく
りと娘を下ろすと苦しそうに蹲る。

「ロビンっ！？」

母親は吃驚してロビンに駆け寄る。

「どうしたの、ロビン ビコか具合が

「おつ奥様」

ロビンが必死の形相で顔を上げた。目をこれでもかとひん剥いて、
何かを堪えるように唇を震わせている。

そんな彼に娘が心配そうに声をかける。

「大丈夫、ロビンくん？」

「まつエリちゃん……逃げ

」

「きやああああああ

背後で友人の金切り声が響いた。

「なつ！？」

母親が振り向くと男が友人に馬乗りになつてガツガツと彼女の顔を殴り付けていた。

「なつなんのよ

」

町中から聞こえてくる悲鳴、車が激突する衝撃、爆音、まるで勝利を誇るフラッグのように次々と立ち上つていく煙の数々。

『Freude schöner Götterfunken Tochter aus Elysium!』

大合唱、そして世界がぐるぐると回転しながら崩壊していく。
ぐきよ

母親の耳に不快な鈍い音が届く。振り替えると娘が倒れていた。首をあらぬ方向に曲げて。

『Wir betreten feuertrunken Himmelische dein Heiligtum!』

そして、目の前にはロビンが立つていて。無表情、囁くように第九を口ずさみながら。

そして、母親の表情は崩れる。それは何故か微笑んでいるように見えた。

「ロビン、私

」

ごき

何か伝えたいことがあつたのだろう。しかし、それも叶わぬまま母親は静かに倒れた。

『Alle Menschen werden Brüder Woden sanfter Flugr! weilt! !』

ロビンの上空を旋回する鳥の群れが狂つたようになっていた。

汝の優しい翼のとどまるところ
人々はみな兄弟となる

その日、世界中の人造人間が暴走した。

たった数分の出来事であつたが全人類の半分を死滅させたという。
その数日後、人造人間権利憲章が速やかに制定されたのは言うまでもない。

人類は人造人間たちとの共生の道を選んだ。
憎悪より勝る、恐怖心に背中を押されて。

(後書き)

この作品は同作者の作品「糸が心の人のカタチ」の数十年後という設定の話です。

(http://ncode.systu.com/n5112d/)

そちらも読んでいただけるとよろしくんでいただけたと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6099d/>

ガラクタどもの～歓喜に寄せて～

2010年10月9日14時48分発行